

1981年2月の『チェリーブラッサム』



作詞:三浦徳子
作曲:財津和夫
編曲:大村雅朗
1981年1月21日発売
売上枚数:67.4万枚
最高位:1位
1979年・年間ランキング:9位

学校の校舎特有の、くすんだ色の天井が、くるくると回って、そして真つ黒になった。

「ああ、自分は、ヤンキーのMにみぞおちを蹴られて、気を失っているんだ」

目の前は一瞬、真つ黒になったが、賑やかな放課後の廊下で、下級生が見つめる中、自分が廊下に倒れ込んでいるのだという自覚はハッキリとあった。

「校内暴力」という言葉が流行語のようになっていた。テレビでは『金八先生』の「腐ったミカンの方程式」が話題となっていて、ちよつとヒロイックにヤンキーが語られているのだが、地方の中学校における「校内暴力」の実態は、廊下に倒れ込んでいる自分の姿のように、吐き捨てるほどにつまらない。

そもそも、今年(81年)に入ってから、金曜日はボーツとしていることが多い。漫才ブームの先頭を行くツービート。その左側、ビートたけしの『オールナイトニッポン』が面白すぎるのだ。元旦から始まった新番組。木曜深夜に、隣の県のラジオ局から流れてくる雑音交じりの電波の中で聴く、それこそ速射砲のようなトークに魅了される。

東京から遠く離れた地方都市なのに、クラスのみんなが、たけし独特の下町のコトバを「ピー」するほどなのだから、そのインパクトは凄まじい。

「オールナイト」は深夜27時に終了。中三には、ちよつとキツイ。今日も、もし、ボーツとせず、感覚を研ぎ澄まして廊下を歩いていたら、Mの存在を早めに察知し、そして、踊場のほうに逃げることも出来たのに。

速射砲と言えば、もう一つ。この81年2月の風景をせわしなくしているのが、松田聖子の新曲、『チェリーブラッサム』だ。この曲のテンポも速い。速すぎると思った。たけしの下町コトバと『チェリーブラッサム』がせわしない。だから、この2月は、せわしない。

1週間前には、Mと何気ない会話をしている。英語が得意な僕に訊いてきたのだ。

「『ブラッサム』って、どういう意味だ? 『チェリー』は分かる。タバコの『チェリー』だろう? オヤジが吸ってるからな。『桜』って意味だと言ってた。で、『ブラッサム』って何だ?」

「『花』だよ。『チェリー』と合わせて『桜の花』と答えて、Mは納得していた。その段階では、関係は良好だったのだ。なのに、なぜ、今日、突然蹴りを入れられたのか。ヤンキーという生き物は、さっぱり理解できない。そもそも、あの長い学ランや、太いズボンが、僕にはダサくつてしょうがない。YMO(イエロー・マジック・オーケストラ)の人民服ファッションの写真好かり見ている僕からすれば。」

高校受験が近づいている。学区で上から3番目程度の県立高校を目指している。「校内暴力」という言葉同様に、「受験戦争」という言葉もよく使われている。なんともきな臭い。でも、この息がつまりそうな中学の空気から逃げ出せると考えれば、受験も悪くない。少し程度のいい学校に行けば、校舎の天井も、もう少し開放的なのではないか。

♪何もかも目覚めてく 新しい私
走り出した船のあと 白い波踊つてる

先ごろ、田原俊彦『恋II DO!』を蹴落として、『チエリーブラッサム』がオリコン1位になっている。YMO好きの僕としては、正直、松田聖子はよく分からないのだが、それでも、この歌詞は分かる。そして、日本全国において、この歌詞を今受け入れている人々は、僕のような連中なんじゃないか。

くすんだ色の天井から逃げ出したい、日本中の中学三年生。「何もかも目覚めてく 新しい私」になりたい、日本中の中学三年生。

そう考えれば、この速すぎるテンポも胸に染みてくる。早く受験が来ないか。早く合格通知が来ないか。そして、早く卒業式が来ないか。このテンポは、そんなトキメキ、もしくは焦りを表す心拍数と同じテンポだ。

僕は、走り出した船になる！

♪つばめが飛ぶ 青い空は
未来の夢 キャンバスね
自由な線 自由な色
描いてゆく 二人で

「日本全国の冴えない中三のみなさん、自由な線、自由な色が描ける四月に向って頑張つて！」と、松田聖子に励まされている気がした。少しいい曲だなと思えてきた。

——と、考えていると、後ろから、頭をはたかれて現実に戻される。ここはまだ81年2月。吐き捨てるような中学校の廊下だ。行きかう生徒全員に響きわたるように、Mが叫ぶ。その言葉によって、さつき突然、蹴りを入れられた理由が判明するのである。

「てめえ、『花』は『フラワー』じゃねーか！」

(完)